五世界記　パイウォーター物語

中川あう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
五世界記　パイウォーター物語

【Ｎコード】
Ｎ０９３７Ｄ

【作者名】
中川あう

【あらすじ】
永遠の命を持つ〈英雄〉パイウォーター。彼は死に別れた恋人ルルドの思い出をひきずりながら世界をさまよい続けている。そんなパイウィーターに、かつての仲間タレクはひとつの依頼を行った。滅亡にひんしているサラゴン王国から王女ミアンを救い出して欲しいという。ミアンはルルドの血をひいていた・・・。

序章

パイウォーターは、一昼夜ほとんど飲まず食わずで旅をしてきた。
『タレクの地』と呼ばれるこの辺りは、見渡す限り荒野原で、砂漠とまではいかないにしろそれに近い。いじけたように低く地を這う潅木以外には、緑と呼べるものはない。あとは、ごつごつした岩の塊がそこら中にごろごろところがったり、突如断崖がそそり立ったり、兎に角旅人にとっては過酷な土地であることは違いなかった。
日差しは容赦なく照りつける。こんな場所では、一刻も早く心から癒される場所、せめて一杯のエールと簡素な食事にありつける場所を求め、進むしかない。
だが、四方八方見渡しても、家ひとつ見当たらない。
（タレクは何を好んでこのような場所に住んでいるのか・・・）
パイウォーターは内心毒づいた。
それにしてもこの方角で合っているのか。目指すタレクの住処へとたどり着けるのか。パイウォーターに一抹の不安がないわけではなかった。
何せ方角などわからなくなる程のだだっ広い平原なのだ。
だが、間違いはなかった。
彼が歩むにつれ、少しずつだが、タレクの気配が強まっていくのが感じられた。彼の努力は、その後数時間経ってようやく報われた。
最初は、山かと思った。
彼の眼前の断崖上には、途方もなく巨大な建造物がそそり立っている。その頂は、雲でもかかっているのではないかと思うほど高い。
「タイレルゴーン」
彼はその建築物群の名を呼んでみた。
タイレルゴーン。それは、タレクがその中で昏々と眠り続けるための居城だ。
彼は立っていた小高い丘を下り、タイレルゴーン城を目指し歩き

出した。
彼の行く手を一人の男が遮った。
乞食のようなぼろぼろの身なりだ。彼の纏っている衣服は最早ぼろ布と化している。
男は手にした杖を振り回しながらパイウォーターに向かって叫んだ。
「お前は何者だ。」
「俺は旅の剣士だ。ミレキーノという。」
パイウォーターは、彼がこの辺りで使っている名で答えた。
「では、ミレキーノ。お前はこの先へは進めぬ。もと来た道を帰るがよい。何人もタレク様の眠りの静謐を乱してはならぬ。」
男の眼は血走り、狂気を宿していた。
「狂える巡礼・・・」
パイウォーターはつぶやいた。
狂える巡礼とは、タレクや老シレノスを崇拝するあまり、彼らの居城に詣で続ける者共をいう。
タレクや老シレノス、それに彼ら『英雄(ロード)』の長たるケードは一切の宗教を禁じた。
しかしそれでは人々の苦痛を癒す術は何もない。
人々の鬱屈した力は、『英雄』を熱狂的に崇拝することで放たれ、かろうじて世界の調和を保っているのだ。
巡礼は杖を上下に持ち引っ張った。すると中から刃が現れた。
(仕込み杖か)
厄介だが、少々手荒い真似をせねばならぬ。パイウォーターは覚悟を決めた。
「どけ。俺はタレクに用があって来たのだ。」
その瞬間、男の眼がきらりと光り、刃を振りかざし飛び掛ってきた。
だが、すぐに男の体は頭から地面に叩きつけられた。

仕込み杖がからんころんと音を立て飛んでいった。
男は地面に伸びていた。何がなんだかわからぬといった風情で白目をむいている。
「殺しはせん。ただ、今後はもう少し相手を見定めることだな。」
言い捨てて、パイウォーターは城の方へと歩き去った。
近づけば近づくほど、タイレルゴーンはその途方もない全容をあらわしてきた。
幾百と数え切れぬほど無数の尖塔がそびえ、城壁は大山脈の如く高く連綿と広がっている。
城の中心部には一際高く巨大な建物が他を圧し聳え立っている。黒い石造りのそれは、荒涼たる景色を更に悪夢の如く見せている。
その塔の何処かがきらりと赤く光ったようにパイウォーターには感じられた。
やがてパイウォーターは城門の前にたどり着いた。
『神々』と『英雄』たちの闘争（ヴァーマ）が精妙に彫り込まれた鉄製の巨大な扉が行く手を遮っている。
しかしパイウォーターが扉に少し触れると、それは重くきしんだ音を立てながら左右に静かに開いていった。
パイウォーターは城内に入った。
広大な城内にはまったく一人の人影もない、いや気配すらなかった。
彼は大城門前広場を突っ切り、館の正面へ続く階段を昇っていた。
階段の両脇には、彫像が並んで立っている。
剣を振りかざす者、騎馬を操り獅子叱する者、あるいはうなだれ物思いに耽る者。
それは『英雄』たちの彫像だ。それらはまるで生ける如く、『十二の神々』と死力を尽くして戦った往時を物語っている。
ふと、パイウォーターは、一人の馬上獅子叱する立像に目をやった。
彼の口には木の枝が突っ込まれてあった。そのためか、像の主は、

幾分呼吸が苦しそうに見える。
パイウォーターは思わず笑い出しそうになった。こんな子供っぽいことをするのは、この城の主タレクの仕業に違いない。
像は『英雄』の一人、ヘイダルのものだった。
ヘイダルとタレクは、平素仲が悪かった。
パイウォーターは館の中へ入った。
薄暗い館はひんやりと涼しく、荒地の酷い日差しに疲れた彼の体を癒した。
幾つもの扉を通り抜け、彼はやがて大きな広間へと出た。
一軍団がそのまま収容できるほど広大なホールだった。薄暗いホールに、荒野を照りつける強烈な陽射しが硝子越しに降り注ぎ、そこだけ切り取ったかのようなまばゆい光の空間を創り出していた。
ホールの奥は暗くてよくわからないが、どうやらひな壇があり、玉座がしつらえてあるらしい。
暗さにようやく慣れてきたパイウォーターの眼に、玉座に座りながらうごめく影がうつった。彼は思わず身構えた。
「俺だ。パイウォーター。久しぶりだな。」
「タレク・・・。あんた、『大神殿』の奥津城で横になっていると思っていたよ。具合は良いのか。」
「あんたをわざわざこうして呼んだんだ。寝ているわけにもいくまい。」
そう言いながら、タレクは玉座から立ち上がり、階段を、こちらへと下りてきた。その足どりは幾分よろめいている。
「いやあ、百年ぶりの目覚めといったところだな。やはり久しぶりの陽の光は強烈だね。」
そう言いながらまぶしそうにタレクは眼を細めた。
そんな彼の様子をパイウイォーターはじっと見つめている。
タレクは、旅を続けるパイウォーターに突如として通信を発したのだった。
それは「英雄」どうしの、昔ながらの連絡方法だ。

互いの夢に現れるのだ。
パイウォーターは、〈ケードの地〉にいた。
彼の地の支配者“静寂(しじま)”のケードの居城ヴェイルハーランをやり過ごし、〈千の都市の支配者〉を自称する〈水の主〉の妾の一人をたらし込み、彼女の臥床を一夜の宿とありついたところだった。安眠を貪るパイウォーターの夢にタレクが現れ、そして言ったのだった。
「すぐに来てくれ。タイレルゴーンで待っている。」
そこで、パイウォーターは急いでここにやって来たというわけだった。
「で、用とは何なのだ。タレク。」
「まあそう急かすな。折角来ていただいたんだ。ゆっくり楽しんでいってくれ。」
そう言うやタレクは右手を上げ大きく振り下ろした。
すると、城の全ての物が急に生気を取り戻したようだった。
彼は次に、左手を高くさし上げた。
するとホールの燭台は灯り、大勢の人々が入って来て忙しく働き始めた。
あっという間に彼らはもてなしの仕度を整え、一礼して静かに去っていった。
大きなテーブルにはみずみずしい花々が飾られ、おいしそうな山海の珍味が湯気を立てている。
「さあ、席についてくれ。」
タレクはパイウォーターを促した。
二人は貪るように食べ始めた。
「相変わらず見事な食欲だな。」タレクの食いっぷりに感嘆してパイウォーターは言った。
「あんた、そりゃ、百年も寝てたんだぜ。腹も空くわな。」
牡鹿のモモ肉にくらいつきながらタレクは言う。
彼が、肉を、魚を、野菜を、果実を、嵐のごとく平らげていくに

つれ、やつれ果てていた彼の体はみるみる生気を取り戻していった。
タレクはようやく食事を終えた。今や彼は往年の姿をすっかり取り戻していた。肩や胸の筋肉は盛り上がり、二頭筋ははち切れんばかりにふくらんでいた。しょぼついていた眼は今やまなじりが裂けんばかりにかっと見開いている。
感心した様子で、そんな彼をパイウォーターは見つめている。
ややあって彼はタレクに言った。
「他の〈英雄〉たちとは、ここしばらく連絡をとっていないのか。」
「いや、いつになるかわからんが、ケードの居城ヴェイルハーランで、俺たち6人は会合する予定だ。俺たちが寝ている間に、俺たちの領土のあちこちにほころびが出たらしい。それを改善する方策を練るのだ。」
重々しくタレクは言った。
「俺はケードから指令を受け、他の者への連絡役をおおせつかった。老シレノス、リュレク、ポルークには連絡をとった。ところがヘイダルだけはつかまらん。やつの夢の中に入ることができぬ。俺を入れぬようだ。」
苦々しい様子のタレクにパイウォーターは言った。
「あんたとヘイダルは仲が悪かったからな。特に最後のころのあれが、ほら、悪いよ。」
「ヘイダルの手柄をとったというやつか。〈ヴァーマ〉十三期戦争の時だな。」
タレクはいまいましそうに舌打ちしながら、ぶどう酒の杯を手に取った。
「ヘイダルはオーダ神相手に苦戦していた。あのままじゃ奴の大鍬で突き殺されていたぞ。そこを俺が助けてやったんだ。感謝されこそすれ、何で俺が奴に憎まれなければならんのだ。」
タレクが口を尖らせながら言うのをパイウォーターは黙って聞いていた。
しかし彼が思うところは、凡そタレクの言い分とは逆のことだっ

た。
（ヘイダルは十中八九、オーダをやっつけてしまうところだった。それをタレクが横取りしたのだ。）
その時、タレクはオーダ神のみならず、彼の妻で性愛の女神ダーラをも葬り去ったのだ。その功あってか、〈ヴェーマ〉後の、ケードによる論功行賞で、タレクは序列三位と定められたのだ。
「ま、どっちにしても、今となってはどうでもいいことさ。それにヘイダルなんて、来ようと来まいと俺はどっちだって良いのさ。」
「ところで、俺への用件は何なのだ。まさか俺もヴェイルハーラン城へ招待されたわけではあるまい。」
「あんたおかしいこと言うね。」
ケタケタ笑いながらタレクは言った。
「ケードに楯ついて、あんたは〈英雄〉から追放されたんだ。あんたがケードに招かれるわけないだろう。」
「では何だ。」
「実はな。」
急に声を落としてタレクは言った。
「サラゴンへ行ってもらいたい。」
「サラゴンだと？〈神々の領土〉ではないか。なぜそのような場所に俺を行かすのだ。」
「サラゴン王ウロボスの次女にミアンという者がいる。」
目を落としてタレクはつぶやくように言った。
「ミアンという定命の者に、永遠の命を持つ英雄タレクがほれてしまったというわけか。」
「馬鹿にするな。」タレクは怒鳴った。
「彼女はな、ルルドの生まれ変わりなのだ。」
（ルルド・・・。）
久しぶりにその名をきいてパイウォーターの胸は高鳴った。
「彼女の血は、数奇な運命を辿り、サラゴン王家へと流れ継がれた。それは事実だ。ロイア、アリソア、レギーネ・・・王家にはルルド

の面影をそっくり受け継いだ王女が幾人も現れ、そして死んでいった。彼女ミアンもその一人だ。」
「あんたは、ルルドの血を定命の者が引き継いでいくのを、そっと見守れば良いではないか。何を今さら自分のものにしようとする？」
「ミアンの命は危機にひんしている。ルルドの血は絶えるのだ。」
タレクは言った。彼の眼は血走っていた。
「なぜかというとサラゴンは滅亡の危機にひんしているのだ。俺にはそれがわかる。〈天帝〉アロギオンは〈使者神〉ブルクをサラゴンへ向け発した。これは、サラゴンの滅亡を意味する。俺の言うことはわかるな、パイウォーター？」
パイウォーターは重々しくうなづいた。
「ではサラゴンへ行ってくれるか。そしてミアンを救い出してくれ。これはあんたの為でも・・・」
「それ以上言うな。」タレクの言葉をさえぎってパイウォーターは叫んだ。
彼の気迫に押され、タレクは黙り込んだ。
ややあって、パイウォーターは言った。
「仕方がない。サラゴンへ行こう。しかし〈莫王〉の地を越え、さらに〈結界〉を越えなければならん。やれやれ、これは大仕事だな。」
「だから、沢山ごちそうしたではないか。」
片目をつぶりいたずらっぽく笑いながらタレクは言った。
「それに今からちょっとしたデザートを食べていってくれ。」
そう言うとタレクは両手をぽんぽんと打ち鳴らした。
すると薄衣をまとった若い女が二人姿をあらわした。衣を透かしてすらりとした裸身が露わだった。女は二人とも完璧なまでに美しかった。
「まさに〈英雄〉色を好むだな。」
そう言いながら、一人の女の腰にパイウォーターは手をまわした。
「タレク、遠慮なくいただこう。」

次の日遅く、昼近くになって、パイウォーターは目を覚ました。
与えられた部屋で一晩中むつみ合った女は、しかし今、彼の傍からは消えていた。
女の残り香がかすかに漂うのを惜しみながら、パイウォーターはその筋骨たくましい体に上衣をつけ、つば広の帽子をかぶり、マントを羽織った。
彼は城門を出ようとしたとき、誰かに見られているような気がして後ろを振り返った。
すると、中庭の緑の茂みの中の女の彫像に目が止まった。
彼はその彫像に近づいた。
その顔には見覚えがあった。昨日の女だった。
パイウォーターは彼女の虚ろな眼差しをとらえ、乳房から腰の線を指でなぞりながら言った。
「また、な。」

ソドリスにて

ミアンは幸せの絶頂にいた。
朝早く目覚めた彼女はすばやく起き上がり、窓の格子戸を開けた。
強い日差しが一斉に彼女にふりそそぐ。
ミアンはまぶしそうに目を細めた。
都ソドリスの街並みが彼女の眼下に広がっている。
ソドリスは緑に包まれた、美しい都市だ。
そのソドリスの、木々の緑や美しく咲き誇る花々、陽光にきらめく寺院の尖塔のガラスなどの全てが、彼女を祝福しているように思われた。
ミアンは婚礼を目前に控えていた。
彼女が嫁ぐ相手、エアドルは、サラゴン王国の有力な貴族だ。しかも彼は、国中の女が夢中になる程端整で美しい容姿を持っていた。
ミアンとエアドルは二年越しの恋愛をあたため、今、ようやく実を結ぼうとしていた。
ミアンは目を閉じた。
ほほにあたる陽光を感じながら、彼女は愛しいエアドルの姿を思い浮かべた。
彼は今、ソドリスを離れ、領地のドラドに帰っていた。
ドラドは隣国のレリュア王国との国境に近い都市だ。
サラゴンとレリュアの国境近くで不穏な動きがあるという。
レリュアの〈悪王〉イリジオ＝ゲーセールはこれまでもしばしばサラゴンへ戦を仕掛けてきた。
今回も、戦につながるかもしれぬ。そう考えたウロボス王は、先手を打つべく、エアドル公に大軍を与え、ドラドへ向かわせたのだった。
エアドルは勇将として知られていた。だからミアンは、エアドルの勝利をみじんの疑いもなく確信していた。ミアンはソドリスを眺

め続けているうち、ふと城に続く街道を、砂ぼこりを立ててやってくる騎馬の一群に目が留まった。
ミアンは胸が高鳴った。
（エアドル様の帰還の知らせかも知れぬ・・・。）
いや、きっとそうに違いない。彼はイリジオ悪王を打ち負かし、ソドリスへ再び、勝利に満ちあふれた笑顔とともに帰ってきたのだ。
ミアンは急いで身支度を整え、城の大広間へ向かうため部屋をだっと飛び出した。
廊下でミアンは侍女のイアとぶつかりそうになった。
「まあ、ミアン様。今、お召しかえに、お部屋にうかがうところでしたのに。・・・。」
「私、ちょっと急いでるの。イア、あとでね。」
言い捨てて、ミアンはバタバタと走り去っていく。
イアはその後姿を、少々あきれ顔で見送った。
ミアンが大広間へ着くと、玉座についた老王ウロボスを囲んで、早くも多勢の貴族や騎士たちが集ってきていた。
ウロボスはその老いた横顔に憂愁の色をにじませ、ほおずえをついている。
ミアンは急に不安に襲われ、胸が高鳴った。
（よもや・・・。まさかエアドル様が・・・。）
やがて大広間に、鎧甲をガチャガチャならしながな、一群の騎士たちが入ってきた。
どの顔もやつれ、息があえいでいる。
先頭の騎士はは、王に一礼し、ぜいぜい息を吐きながら報告した。
「タイス城からやって参りました、アジェノンであります。」
（ドラドからの使者ではないのか・・・。）
ミアンは幾分安心し、胸をなで下ろした。
「何事があったのか。聞くところによれば・・・。」
ウロボス王の声はふるえていた。
「はっ・・・。」

騎士アジェノンはひざをつき、両手をがっしと床において顔をうなだれた。
「どうした、黙っていては何もわからぬ。」
王の傍に立っていた、王弟で宰相のガエマ公がいらだたしげに報告を促す。
すると、アジェノンの目から涙がぽたぽたと滴り落ちた。
広間にいた人々は一斉にどよめいた。
「静まれい皆の者。この者の報告を聞こう。」
そう言ってウロボスは腰を下ろし、再びアジャノンを促した。
「さあ、落ち着いて申してみよ。真実を語るのだ。タイスで何があったのかを・・・。」
（タイス・・・。本当にそこで何事が起こったのか・・・。）
今やミアンも、やつれ切った騎士アジェノンを食い入るように見つめていた。
アジェノンは、ややあって叫ぶように言った。
「申し上げます。ブ、ブルク神がサラゴンにご降臨になられた模様であります！」
広間の人々は再び、一斉にどよめいた。中には悲鳴を上げる女もいる。
ガエマ公はどんどんと剣をつき鳴らし叫んだ。
「ええい、静まれい。」
老王はがっくりと顔を落とした。もはや諦め切った、観念した表情をしている。
（まさか、そんなことが・・・。あり得ない。何かの間違いにちがいない。）
ミアンも驚きのあまり、我を見失っていた。
ガエマ公の制止にも関わらず、人々の喧騒は収まらない。互いに声高に議論し合う貴族たち、へたり込む女たち、どの人々も興奮し、我を見失っていた。
「なぜ、ブルク神が降臨されたとわかるのだ。詳しく状況を申して

みよ！」
　切り裂くような大きな鋭い声でガエズ公は、アジェノンに問うた。広間はしんと静まり返った。
　人々は、固唾をのんでアジェノンの返答を見守っている。
　震える声で騎士は訥々と語りだした。
「我々タイス守備軍は、〈ハイレの森〉近くを定期的に巡回しております。去る、第五節第二曜日の晩、私を隊長とし、ロートスを副隊長とした、五人からなる巡回隊は・・・」
「ええい、細かいことは良いわ。早く、大筋を申せ。」
「ロレアル、この者は疲れておるのだ。それに緊張しておる。急かすものではない・・・」
　王はガエズ公をたしなめ、そしてアジェノンに言った。
「お前の好きなように、ゆっくり申してみよ。あせらず話をきこう。」
　アジェノンは、王の優しい言葉を受け、固い表情を和らげた。そして彼は腰をしゃんと伸ばし再び言葉を続けた。
「とにかく我々はその晩、ハイレの森の奥深くまで巡回を続けておりました。そして、〈神々の道〉の外壁まで至ると、暗闇の向こうから地響きとともに十数頭の獣に引かせた大きな戦車がやってまいりました。」
「ブルクだ・・・。」
　広間にいた貴族の誰かが言った。
〈神々の道〉は〈結界〉の向こうから始まり、〈ハイレの森〉や〈さすらいの森〉を越え、〈十二国〉へと広がる道だ。道の両脇は低い石壁で固められている。人は立ち入ることはできない。入ればただちに血を吐いて死んでしまうとされている。そこに入る者はなかった。〈神々〉だけが通ることを許された道なのだ。
「我々は固唾を飲んで見守りました。やがて戦車は我々の目の前で静止しました。戦車は、十二頭の狼が曳いており、狼は口から炎を噴いておりました・・・。」

どこかで女のすすり泣く声が聞こえた。ミアンモアジェノンの言葉に呆然となった。
十二頭の火を噴く狼が曳く戦車。
その主は〈使者の神〉ブルクに違いなかった。
ブルク。〈使者の神〉。災厄を告げるもの。
彼は〈神々〉の長たる〈天帝〉アロギオンの言葉を伝える神であり、たいていの場合、彼の到来は、その国の「滅亡」を意味してきた。
ただし、ここ幾百年もの間、ブルクが〈十二国〉に到来したことはなかった。
（なぜ、今になって。しかもこのサラゴンに・・・。）
ミアンと同じことを、この大広間にいる者たち全てが思っているに違いない。
そして又、皆、同じようにこんなことを考えているのだ。
〈〈神々の道（ゴッド・ロード）〉は、サラゴンへ止まらず、トリアランへもゲハーラへも、そしてレリュアへも続いているのだ。
きっと、ブルク神は、レリュアへ向かわれるのだ。そしてかの〈悪王〉イリジオ＝ゲーセールを懲らしめられるに違いない。）
「ブルク神は行先を告げられたか。」
老王の声は震えていた。
アジェノンは王をきっと見据え、血走った眼で答えた。
「申されました・・・。」
人々はその続きを固唾を飲み、緊張した表情で待っている。
「で、どこなのだ。神の行先は。」
ウロボスの眼もかっと大きく見開かれ、血走っている。
「神は・・・ブルク神は・・・。」
「ブルク神は。」王の声がしんと静まり返った大広間に響いた。
アジェノンは目を閉じ、驚くほど落ち着いた声で答えた。
「神は行先を告げられました。
『余ブルクは、天帝の命により、サロゴンへ向かう。』と。」

そう言うと、アジェノンは大広間の床にくなくなと倒れこんだ。
彼は気を失っていた。
ミアンの周囲の全てが、がらがらと大きく音を立てて崩れていくような気がした。
人々の声が、彼女の意識の中で遠のき、次第に小さくなっていく。
へなへなと倒れこみそうになるのを必死にこらえながら、彼女は柱にもたれ、体を支えていた。
老王が静かな声で命じるのが聞こえる。
「ブルク神をお迎えする準備を急げ。」
彼は小さな声でつけ加えた。
「神は、まもなくソドリスへ到るであろう。すぐに。まもなく・・・。」

さいはての都

パイウォーターは、寝椅子に横たわり、海を見ていた。
晴天の光を受け、穏やかに打ち寄せる波が白く光る。
この日和の良い日にベランダに出て、寝そべって、飲み物をすすりながら、海を眺めるのは実に気持ちがいい。
「・・・＜莫王＞は手強かったな。」
思わず発した独り言に、後ろから男の声が答えた。
「ん、何か言ったかい。」
パイウォーターは寝椅子の上で体をねじり、声の主を見た。
そこには背の低い人物がいた。小人といっていいほど彼は小さかった。
パイウォーターは彼に言った。
「何でもない。一人ごとだ。」
「ん、そうか。あんた、飲み物のお代わりは良いかい。」
「ありがとう。もう一杯もらおう。」
パイウォーターは杯をさし出した。
小人はそれを受け取り、飲み物をなみなみついで、氷をうかべ、再びパイウォーターに差し出した。
「ありがとう。ときに、ヴェイルよ。これは何だ？酒でもないようだが。」
「正体のわからぬものを飲んでいたのかい。」
ケタケタとヴェイルは笑った。そして答えた。
「これは“サイ”だ。精神を和らげる作用をする。我々に古来から伝わる飲み物だよ。」
確かに“サイ”と穏やかに打ち寄せる波は、殺気立っていたパイウォーターの心を次第に落ち着かせていく。
ここは＜さいはての都＞と呼ばれる都市だ。
かつて＜まつろわぬ者たち＞が建設したといわれるまち。

今は住人は、ヴェイルと、彼をしたってあつまってくる＜もの言う獣たち＞しかいない。
建物の多くは打ち捨てられ、廃墟となっていた。
「＜莫王＞は強かった・・・。結局打ち負かすことはできなかった・・・。」
苦々しげにパイウォーターは言った。
「あんた、へぇ、＜莫王＞その人と戦ったのかい？そりゃ命あっただけでも物種じゃないか。」
目を丸くしてヴェイルは言った。
「彼の領土に入ったら、一人で、手下も連れずに、俺に打ちかかってきやがった・・・。」
パイウォーターは目を閉じた。
＜莫王＞とは、砂漠の支配者だ。
その広大な不毛の地は、神々のものでもなく、又、英雄たちのものでもない。
＜莫王＞の正体はわからない。
＜ヴェーマ＞直後のどさくさにまぎれ、いつのまにやら砂漠の支配権を確立したのだった。
まあ、砂漠は支配してもあまり益のない地だから、＜神々＞も＜英雄＞も黙って彼を見過ごしているのだ。
（しかし、若タレクなどは少々腹に据えかねているらしい。）
パイウォーターが＜神々の領土＞の中にある、サラゴン王国へ向かうには、どうしても＜莫王の領土＞を通る必要があった。
彼が＜莫王＞の地へ足を踏み入れるとすぐに、目の前に一人の異装の人物が立ちはだかった。
火炎を形どった黄金のかぶと。赤い金属でできたギラギラ光る鎧。羽織ったマントも赤く、右手に諸刃の矛を持ち、
それをブンブン振り回している。
＜莫王＞その人に違いなかった。
彼は言った。

「やあ。ようこそパイウォーター。あんたと決着をつける時が来たようだな。」
そう言うと莫王は矛を振りかざし、いきなり、パイウォーターに打ちかかってきたのだった。
二人は激しく刃を交わした。莫王は口から炎を吹き、パイウォーターに浴びせた。
パイウォーターは済んでのところでそれを避け、剣を振るい莫王に切りつけた。
二人の周囲を火炎が取り巻き、赤く彩っている。
灼熱の中、二人は長きにわたって死力を尽くして戦ったが中々決着がつかない。
そのうち、夜の帳が下りようとしていた。
すると莫王はいきなり矛をひいて、パイウォーターの前から姿を消したのだった。
再び苦々しげに舌打ちしてパイウォーターは言った。
「くそ、済んでのところで奴を取り逃がしてしまった。もう少しだったんだ。奴をやっつけられたのに・・・。」
「＜莫王＞を打ち負かしたところで、骨折り損なだけさ。＜英雄＞や＜神々＞ならともかく、領土を持たぬあんたに得になることは一つもないよ。」
そう言ってヴェイルは彼を慰めた。
苛立つパイウォーターの心に、ヴェイルの言葉はやさしくしみとおる。
「ありがとう。友よ。では、俺は、これからに備えてしばらく眠るとするか。」
「＜アイ＝ダイ＞というわけだね。」
わけしり顔に澄ました声がした。それはヴェイルのものではなかった。
「ゆっくり眠りたまえ英雄パイウォーターよ。戦を忘れたまえ。刃をしまい、詩を口ずさめ。女を口説き、長い髪の香りに陶然となっ

たあの日を思い出したまえ。」
「彼は、どうも俺は苦手だな。」
苦笑しながらパイウォーターは言った。
「ロキは良い奴さ。ずっとあんたを崇拝してる。」
ヴェイルは言った。
「の、ようには見えんが。」パイウォーターは言いながら、ヴェイルの傍に、いつの間にか座り込んでいた茶色の犬に向かって微笑んでみせた。
先ほどの声の主は、その犬だった。
ロキは＜もの言う獣たち＞の一人だ。
彼らは、かつて＜まつろわぬ人々＞の同盟者であり、＜ヴェーマ＞後、わずかに残ったその生き残りは、ヴェイルのもとに集まり、細々とくらしている。
「秘めたる崇拝というのは、中々相手に伝わらんものさ。」
そう言ってロキは片目をつぶってみせた。
「ありがとう、ロキよ。」
そう言ってパイウォーターは寝椅子から立ち上がり、二人に言った。
「眠るとするよ。＜アイ＝ダイ＞だ。俺をしっかり守っておいてくれ。頼む。」
そう言って、彼はヴェイルとロキに頭を下げた。
「何を水臭い。俺たちに任せておけ。」
ヴェイルが言った。
「ゆっくりおやすみ。パイウォーター。」
ロキも言った。
パイウォーターは手を振り、与えられた自室へと去っていった。
＊
（彼女をずっと追いかけている。長い黒い髪、青く切れ長の、イン

ク壷を思わせる瞳。彼女は・・。彼女は・・・。）
「何を見てるのよ、パイウォーター。」
クスクス、彼女は笑った。
パイウォーターは平和なひと時を過ごしていた。
彼女と。そう、ルルドと。
彼らは見渡す限りの草原の只中に横たわっていた。
落ちようとする陽光に赤く色づきはじめた草木が輝いた。
此処はとある男爵（バロニィ）領だ。名前は忘れてしまった。
夕暮れを告げる大寺院の鐘の音も耳に入らぬほど、二人は夢中で愛しあった。
彼らは、ともに、かつて旅をした。二人で敵と戦った。そして愛しあったものだ。
パイウォーターは透きとおるような彼女の白い肌にそっと口をつけた。
その時、ルルドは遠くを見る眼差しをしていた。
幸せだった。彼女と別れの時が訪れるまでは。
ある朝、目覚めると、傍らに寝ていたはずのルルドの姿は消えていた。
パイウォーターは焦らなかった。
よくあることだ。
ルルドは、パイウォーターと共に旅をしながら、突如忽然と、姿を消すことがあった。
一日や二日はざらのことで、時には一月近くも姿を見せないこともあった。
パイウォーターは平気だった。結局最後は自分のもとに帰ってくるのだ。
だが、その時は妙に引っかかるものがあった。
漠然とした不安。それは見事に的中した。
その晩、パイウォーターは“若”タレクに呼び出された。
そこは敵陣近くの洞窟だ。＜ヴェーマ＞第六期戦争が始まろうと

していた。
驚いたことにタレクの傍には、＜英雄（ロード）＞の長、ギュリアードがいた。滅多にないことだ。何か重大なことが起こったのだ。
そして、それは、ルルドに関することだ。
青ざめた顔のタレクは、険しい顔をしてパイウォーターを睨みつけた。傍のギュリアードは腕を組んで目を閉じている。
やがて、タレクは、パイウォーターに、ある衝撃的な事実を告げた。彼は驚きのあまり、剣を取り落としその場に崩れ落ちた・・・。
そこでパイウォーターは夢から覚めた。
彼は汗をびっしょりかいていた。
タレクは夢の中で何を彼に告げたのか。
覚めた今となってはもはやわからない。
それが彼にはもどかしかった。
ルルドの秘密に関わる重大なことのはずだった。
それは、膨大な日々の生を生きてきたパイウォーターにとって、今となってはよみがえらせることができない記憶だった。
かろうじてそれが可能な時がこの＜アイ＝ダイ＞即ち過去を振り返り、楽しみに浸り、苦しみを吐き出すための催眠の時だった。
「水を持ってきたよ。」
寝床に横たわるパイウォーターの傍に、いつの間にかヴェイルが立っていた。
「ありがとう。」
力なくパイウォーターは答えた。
「あんた、大きな声でうなされていたよ・・・。」
ヴェイルは慈しむような眼差しをパイウォーターへ向けた。
「いつも、同じところで目が覚めるんだ。それがもどかしい。今回もそうだ。ルルドとの思い出の核心部分に触れることができん。」
「そうなると、あんたは壊れてしまうかもしれんよ。」
「俺は、もはや長く生きすぎた・・・。」
パイウォーターの声は血を吐くような苦しさに満ちていた。彼の

目は涙をたたえている。
「もし、秘密を知り、それが原因で壊れてしまったならば、それも良いよ。俺はもう疲れたよ。」
「休むんだ。また、しばらく眠るがいい。＜アイ＝ダイ＞は終わった。もう今度は過去を振り返るつらい眠りではなく、あどけない、普通の夢を楽しむがいい。」
そう言って、ヴェイルはパイウォーターの両手をそっと優しく握りしめた。
「おやすみ、パイウォーター。」
そう言って、ヴェイルは灯を吹き消した。
暗闇と静寂に包まれ、パイウォーターは、いつしか深い眠りに落ちていった・・・。

「英雄とは辛いもんだね。」
ロキが言った。
ロキとヴェイルは炉の傍に座り込み、並んで燃える火を見つめている。

「ああ、そうさ。俺たちもたいがい長く生き、いろんなつらい目を見てきたが、パイウォーターは俺たちの2倍も3倍も、いやもっと長い生を生きてきたのさ。」
ヴェイルはそう言って炉にシチューの入った鍋を置いた。
「明日の朝、奴にこれを食わせてやろう。精がつく。」
「＜アイ＝ダイ＞はやらねばならん行事なのか。」
ロキがたずねた。
「ああ、そうさ。他の＜英雄（ロード）＞たちは百年くらい平気で眠り続ける。その間、心に溜まったいやなものはすっかり忘れ、洗い流されてしまう。そうして、長い間生き続けるために、心の均衡を保っているのだ。」
ロキは黙って聞いている。

「だけどパイウォーターの場合は、アロギオンの呪いを受け、永遠に彷徨い続ける運命を科せられているから、長時間眠り続けることができない。だからああやって頻繁に＜アイ＝ダイ＞を行う必要があるのさ。」

ロキは黙り込んだままだった。深く考え込む眼をしている。

ヴェイルが言った。

「俺たちは少ししか力になることができん。しかし、できる限りのことはしようじゃないか。なあ、ロキよ。お、いけない、シチューが煮えすぎちまう。」

あわてて、ヴェイルは炉から鍋を下ろした。

＜さいはての都＞の夜は、静かに更けていった。

ブルクの到来

いつもと変わりない秋空だった。
しかし、ソドリスは何かが変わってしまった。
木々の緑や花々や光にきらめく噴水やら高々とそびえ立つ＜オーダ国家大寺院＞が変わったのではない。
住んでいる人間が、変わってしまったのだった。
ブルク神の到来が告げられたあの日以降、人々はすっかり虚脱状態に陥ってしまった。
貴族も、騎士も、女官や貴婦人たちも、王城内に暮らす人々は、上から下まで一様に、諦めきった表情をただよわせｈている。
しかし、中には元気よく、城内の人々に説教してまわる者もいた。
「何、ブルク神が来るからってそんなにビクビクするこたぁないよ。彼は必ずしも災厄を与えるばかりではないさ。過去には、その国の王に栄典を与えるため、アロギオンから遣わされた場合もある。ええと・・・、それはな。」
「天帝紀一〇五年のことだろう？アロギア帝国でのことだ。」
一人の男が重々しく言った。彼は歴史学の教授だった。
別の男が言った。
「何だ。アロギアの話か。それなら話は別だよ。かの国の皇帝は＜天帝の仔＞と呼ばれている。＜十二国＞でも別格なんだ。天帝アロギオンの恩寵を失うわけはないさ。」
すると、最初の男は黙り込んだ。人々はため息をついて言った。
「結局、ブルクがやって来ると、ほとんどの国は滅ぶということさ・・。」
諦め、だらけきった宮中の人々のもとへ、息せき切って早馬の伝令が飛び込んできた。
「申し上げます。ブルク神と思われる者が、＜神々の道＞を真直ぐソドリスへ向かってきます！」

「ついに来たか。」
宰相ガエズ公は溜息をつき、そして大声で廷臣に命じた。
「王に至急この事を告げよ。そしてブルク神をお迎えする準備をしろ。＜オーダの門＞を開いてお迎えするのだ。」
そして、ガエズ公はせかせかした足取りで窓の側へ行き外を眺めた。
既にブルク到来の噂が広がったのか、眼下に広がるソドリスの街並みにも、気のせいか、緊迫感が漂うようだ。
サロゴンの国神である農耕神オーダを祀る＜国家大寺院＞も、常にも増して重々しくそびえ、陰気な影をソドリスの街並みに落としていた。
ガエズ公は、ソドリスの正面玄関にあたる、＜オーダの門＞に目をやった。
＜神々の道＞に通じるその大きな門は、＜神々（ゴッズ）＞しか通ることを許されない。王であっても、その者のために門が開くことはなかった。
しかし、その門は今や大きくあけ放たれている。
＜神々＞の一人、“使者神”ブルクが、今、その門をくぐり、ソドリスへやって来ようとしているのだ。
＜オーダの門＞そしてその向こうの＜神々の道＞がえんえんと続くソドリス郊外の平原の辺りにも、おびただしい数の軍勢がひしめいていた。
部隊と部隊の間を、＜大竜（グレートドラゴン）＞の紋章旗を翻した騎士の一群が駆け抜けて行った。
ウロボス王の近衛兵だ。王の命で、ブルク神の姿を確かめるべく急行したに違いない。
ガエズ公が、街道の遠くを目を凝らし見つめるうち、砂ぼこりをけたてて、すさまじい速さでやってくる何かに気づいた。
「ブルクだ。」
公は叫び、大剣を鳴らしながら階下へ駆け下りていく。

ミアンはその頃まだ、惰眠を貪っていた。
この頃の日常の重々しい空気から解放されるのは、夢の中でしかなかった。
（ドラド公殿、ほうら、あれを見て。）
夢の中で、王女ミアンは恋人エアドルに大好きなソドリス薔薇の茂みを告げていた。楽しいひと時・・・。
「起きて、起きてください。王女様。」
夢の時間は、体を揺り動かす侍女によって破られた。
「どうしたの・・・。」
いまだ寝ぼけまなこのミアンに、侍女イアは言う。
「寝ている場合ではありませぬ。急いでお着替えをなさいませ。」
「何があったの。」
「ブ、ブルク神をお迎えするのです。」
その一言で、ミアンは冷水を浴びせられたように感じた。
（恐れていた時がついに来たのだ。）
ミアンは立ち上がり、窓の下の王宮前広場を見下ろした。
大勢の人々がひしめいている。その中を掻き分けるようにして＜大竜＞旗をはためかせ、近衛兵が馬を駆ってオーダ門へと急ぐ。
先頭の騎士は何度も、大きくホルンの音を鳴らした。
ミアンにはその音は、まるで世界の終わりを告げるかのようだった。
着替えを急いで済ませたミアンは、イアとともに廊下を駆け、階段を下り、城門へと急いだ。
城門には、既に彼女たちのために四頭立ての馬車が用意されている。
馬車の前でいらいらしながら待っていた男は、ミアンの姿を見るとほっと安堵の色を浮かべた。
「お待ちいたしてましたぞ、ミアン様。さあ、早く馬車にお乗りくだされ。＜国家大寺院＞に急がねばなりません。」
そういうと、男は、せきたてるようにミアンとイアを馬車に押し込み、そして、ひらりと身をひるがえし御者台へ飛び乗った。

「そうれっ、はいっ」
男が鋭くくれた鞭に、けたたましくいななく馬の鳴き声とともに、がたごと音を立て、馬車は大寺院への道を急ぐ。
＜国家大寺院＞は、ソドリスの中心、即ち王城のある地方から少し離れた、広大な敷地に建てられていた。
ミアンを乗せた馬車はすさまじい砂ぼこりを立てながら、大寺院前広場へ急停車した。
「さあ、さあ、急いでください。」
御者の男の声に急き立てられ、ミアンとイアはドレスの裾を手に持ち、小走りに大寺院の中へと入っていく。
大寺院の礼拝用大広間は既に大勢の人でごったがえしており、広いホールは身動きもままならぬ程ぴったりと互いに寄り添った人々によって埋め尽くされている。
ミアンとイアは、一人の男に先導され、人々をかき分けながら前へと進んだ。
やがて二人は、オーダ神の聖像の前へ出た。
そこは、王族と、高位の貴族のために広くあけられていた。
老王ウロボスは、ミアンより早く既に大寺院に到着していた。
彼は、床に額づき、目を閉じ手を合わせ神に祈りを捧げ始めた。
その王の姿を見て、会堂を埋め尽くしていた人々も一斉に床に額づき目を閉じる。
ミアンも、王にならい、オーダ神に祈りを捧げた。
（神よ、とこしえの神、生産の神オーダよ。サロゴンに幸をお与え下さい。国をお救いください。）
「お前たちが祈りを捧げる神オーダはもはや存在しない。」
会堂に大きくしゃがれた声が響き渡った。
人々はびくっとして思わず目を開ける。
ブルク神の声だと思ったのだ。
だが、それは違った。一人の老いた貴族だった。
彼の目は血走っていた。ブルク到来を待ち受ける極度の緊張に気が

ふれたようだった。
とりおさえようと近衛兵が慌てて駆けつけた。が、その手を振り払いながら老人は続ける。
「だって、そうだろう？お前たちも知っているだろうが。我々の国神、オーダは既に死んだのだ。＜ヴァーマ＞において、英雄（ロード）タレクの“三叉矛（トライデント）”の餌食となって亡んだのだ。その時からこの国は亡び・・・」
そこで彼の口は塞がれ、二人の近衛兵にがっしりと体を抱きすくめられ、ひきずるように外へと連れ出された。
ブルク神ではなかったことにほっと安堵のため息を人々がついたのも束の間、すさまじい音が会堂に響きわたり、地響きが大寺院を揺るがした。
「ドーン、ドーン・・・。」
「見て参れ。」
ウロボスの命で脱兎の如く、一人の近衛騎士が外へと飛び出した。
聖堂の外の、芝が敷きつめられた広々とした庭に騎士は向かった。
庭の真ん中を一本の太い道が街のほうに伸びている。両脇は低い石垣で囲まれている。
＜神々の道＞だ。＜神々の道＞は幾つか枝分かれしており、その枝道の一つの終着点がこのサロゴンの＜国家大寺院＞だった。
騎士が目を凝らすまでもなく、地響きの正体はすぐにわかった。
それは大きかった。
とほうもない高さまでその体はそびえ立ち、顔は大空の雲を吹き払うかのような位置についている。
「ブ・・・ブルクだっ」
騎士は大地にへたり込み、動けなくなった。
ブルクは、戦車を捨て、巨大な姿となり、真直ぐオーダ門から大寺院まで歩いてきたようだ。
「ズンッ、ズン」
ブルクが歩を進めるごとに、大地を震わせ、建物を揺るがせる。

聖堂の中では、今や、ブルクの到来を悟った老王ウロボスが観念しきった表情で目を閉じている。
外の庭では、先ほどの騎士がへたり込みながら、驚愕の目をブルク神に向けている。
騎士の側を悠然と歩を進め通過したブルクは、大寺院の裏手へと至った。
それはちょうど、オーダ神の聖像が祀られている場所の裏にあたる。
そこはとほうもない高さの入り口が設けられていた。
＜神の扉＞と言われ、言うまでもなく＜神々＞のための聖なる玄関だ。
ブルクの姿は、巨大な大寺院にひけをとらぬほど大きくそびえ立つ。
ブルクは、＜神の扉＞の前でしばらく佇んだのち、やおら手をかけ、扉を開いた。
大聖堂の、細いガラス窓を通してしか光の差さぬ薄暗い空間にひしめいていた大群衆は、大きな音と、突如として頭上高くから差し込んでくるまばゆい日の光に目を細めた。
やがて一斉に人々はあっと驚きの声をあげた。
オーダ神の大きな聖像の後ろの空間には今や何もなかった。柱や様々な装飾はすっかり取り払われていた。
いや、何もなかったと言うべきだろうか。それらに代わり、今や大きな物体が、オーダの聖像も小さく見えるほど、そびえ立っている。
彼の頭はあと少しで大聖堂の天井に達しようとしていた。
「ブルク神ー。」
人々は一斉に頭を床につけ震えおののく。
誰も一言も発しない。ブルクもまた押し黙り、圧倒的巨大さで立ち尽くしたままだった。
静寂が、つかの間、大聖堂を支配した。
それを破ったのは、老王ウロボスの声だった。
「か、神よ―。ブルク神よ。サロゴンへようこそ御降臨なされた。」
「そちは、誰であるか」

無機質な冷たい声だった。人々には、それが自分の心の奥底に直接響くように感じられた。
「この国の国王、ウロボスであります。」
「では、王よ。王ならば、余がここへ参った理由がわかっておろう」
ブルク神の大きな眼が赤い光を帯び始める。
「余、ブルクは天帝アロギオンの命でこの地へ参った」
「天帝は何をお告げになられましたか。」
ブルクはウロボスの問い
には答えず、いきなり両手でオーダ神の聖像を抱えあげた。
それはブルクの手の中で赤く火を発し、やがて白くまばゆく輝き、
そして・・・姿を消した。かつての国のシンボルは、あっという間
にあとかたもなくなってしまった。
ウロボス王も、ガエズ公も、ミアンも又、皆呆然と為すすべもなく
ブルクのすることを見守った。
「王よ、聖剣を返却せよ。それが天帝の命である」
（聖剣・・・、それを失えば・・・）
この国は亡ぶ。ミアンはそう思った。“聖剣”は遠い昔、一千年も
前、この国を神が与えたもう証として、天帝アロギオンが与えたも
のだ。それを返却せよというのは、サロゴンを神が国として認めな
いと言うに等しい。
（なぜ、天帝は、サロゴンを嫌うのか。亡びよと望まれるのか。）
人々も、ミアンも、同じことを考えているに違いない。
ミアンはふと、目の前で額づく叔父のガエズ公ロレアルに視線を落
とした。
ロレアルは鎧の上に陣羽織を着ていた。その背には＜大竜＞の姿が
刺繍されている。
（大竜。まさか・・・。）
ふと、頭の中に浮かんだ想念を振り払うかのようにミアンは頭を振
った。
ブルク神の申し渡しにも関わらず老王はじっと動こうとはしない。

聖剣を返却した瞬間から、サラゴンは文字通り亡国となる。
国を統べる王として、なかなかに踏み切れることではなかった。
沈黙し続ける老王をブルクは冷然と見下ろしている。
静寂が辺りを支配した。誰も一言も発せず、ブルクも又、動かなかった。
しかし、やがて、ブルクは首を振りこう言った。
「王よ、時間がないのだ。日没までに天帝の下に戻り、首尾を報告せねばならぬ。そちと遊んでいる時間はない」
そう言うや否や、ブルクはかっと赤い眼をむき、一層恐ろしげな形相でウロボスをねめ据える。
「さあ、早く聖剣を渡すのだ」
ひときわ重く、心にのしかかるようなその一言に、老王はびくっと体を震わせた。
そして、傍らの騎士に命じた。
「・・・聖剣を、オーダ像の台座から出せ。」
老王は、両手で聖剣を捧げ、ブルクの前に額づいた。その体は小刻みに震えている。
やがて、その体を覆うかのように大きな手が高みから下りてくる。
ウロボス王は聖剣をそっとブルク神の手の上に置いた。
聖剣がブルクの手に包み込まれ、再び高みへと昇っていくのを見ながら、老王も、ロレアルも、そしてミアンも皆、一様にはらはらと涙を流した。

黒い城

彼は侍臣を遠ざけ、一人暗い謁見用広間の玉座に座り、物思いにふけっていた。
端整な彫りの深い顔に憂愁の色をにじませ、唇はきっと結ばれている。
きっと機嫌が悪いに違いない。そう思った侍臣たちは彼を畏れ、呼ばれるまで近づこうとしなかった。
ただでさえ気分屋の王だ。これまでにもちょっとした過ちを問われ処刑されたものは数知れずいた。
日は傾き、コルヴァドールの山並みへと没しようとしていた。
夕暮れ時の光線が、黒い大理石で造られた大広間に微妙な陰影をつくり出している。
ふと、彼は、考え込むのをやめ、顔を上げ広間の天井を見上げた。
天井一面に華々しい戦闘風景が描かれている。
彼の遠い祖先が活躍した、大昔の戦争＜ヴァーマ＞の様子を再現したものだ。それも彼の祖先“ゲルシス”が武勲を立てた場面を中心にして。
“ゲルシス”は＜十二神＞のうちでも最強とうたわれた、＜地王＞ジョルキオンの侍者だ。戦いで数多くの功名を立てた。その功あって彼は＜半神＞に列せられたのだった。ゲーセール一族がこの地上に初めて名を表した時だった。
（だが、俺は、ゲルシスの子孫ではない）
この事は、このレリュアでは彼だけしか知らない。
いや、正確にはもう一人いたのだが、もうだいぶん前に亡くなってしまった。
（過去などどうでもよい。王たる俺は己の欲するまま前へ進むだけだ。）
この数ヶ月のレリュア近隣の情勢は、彼、レリュアの＜悪王＞こと

イリジオ＝ゲーセールが未来への希望を膨らますのに十分なほど好ましいものだった。
（もう、あと一歩だ。あと一押しであの国は亡び、俺は欲しいものを手に入れる。）
彼は手を挙げて叫んだ。
「ええい、辛気臭い。灯を明明とともせ。今宵はコスの奴輩を屈服させた勝利の宴ぞ。」
柱の陰にいた廷臣達は、やれやれといった表情で肩をすくめ、そして急ぎ王の命に従った。

謁見用大広間は、イリジオの祖父ダルマティオ狡猾王が、金に飽かせて改築した広大かつ豪華なものだ。それまでのホールの何倍もの大きさのものを欲した。ダルマティオはトリアランやコスとの交易で得た大金を投じこの大広間を造り上げた。
広間は二千人がらくらく収容できるほどの広さがあった。
そして今やそのホールを凡そ二千人余りが埋め尽くしている。
イリジオ配下の近衛騎士団“黒騎士”だ。既にヤヌ酒やタイヴァン・ワインやエールで酔っ払った彼らは足を踏み鳴らしたり、互いに声高にしゃべりあったり、テーブルの上の珍味を肉汁を滴らせながらがつがつ平らげたりと騒々しいことこの上ない。
　だが玉座の上のイリジオ王はそんな彼らのふるまいに一向に頓着しない様子で、ぼんやりと視線を虚空に漂わせながら、タイヴァンのビンラージに時折口をつけている。
宴が酣になった頃、騎士たちの間から悲鳴のような喚声が上がった。
黒い鎧兜をつけた騎士の群れが一斉に一方向を指差しどよめいた。
「コス！コス！」
「畜生め。こやつらに直ちに死を、王よ。」
　怒号する騎士達の間をかき分け、一人の気難しそうな背の高い老人が三人の打ちひしがれた人々を王の前に導いてくる。
　ゴブロン織りの黒い高価そうなマントを羽織ったその老人とは凡

そ対照的に、三人の衣服はすすや泥に汚れところどころ破けていた。口々にわめき叫ぶ人々の中で、三人のうちの一人がきっと顔をあげた。
若い女だ。切れ長の目をするどく光らせ、背を伸ばし玉座のイリジオ王をにらみつけている。その様子はいかにも誇り高く、彼女が身分の高い一族の者であることをうかがわせた。女は口を開いた。
「イリジオ王よ。私たちをどうするおつもりですか。我々はあなたの示した条件をのみ、コスの城と町を明け渡したのです。さあ、今度はあなたが約束を果たす番。」
そして女はきっと鎌首をもたげ、イリジオを見据えて言った。
「王よ、即刻、我々を解放しなさい。」
「カカカカカカ。」
奇妙な声で、突然王は大笑した。傍らの小姓は青ざめ緊張した眼差しで、そっと王のほうを盗み見た。王は紅潮し、大変機嫌がよいように見えたが、実は激しい怒りを爆発させる寸前であることは、長年仕えた彼の廷臣達は皆よくわかっていたのだ。
イリジオは女に向かって言った。
「余は王だ。お前たちの王だ。王たる者、配下の者どもと対等に約定などせぬ。」
そして玉座の右手に座り、口元を油でてからせながら鹿の腿肉を貪り食っている太っちょの若い男に声をかけた。
「ローヴェール、お前はコスの攻略に功があった。この女をお前にやろう。」
「なんと。」
太い男は、太鼓腹をゆすりながら驚きに目を見張り立ち上がった。
「コスの総督の姫君をこの私に下さるのですか。」
「お前は余の甥ではないか。遠慮はいらぬ。」
ローヴェールは口をぬぐい、王の前にぬかづいて言った。
「有難く頂戴いたしまする。」

「なかなかに気の強い女子だ。取り扱いに注意いたせ。」
「いや何。このくらい気の強い女の方が楽しみが増えるというもの。」
王とローヴェールは二人顔を見合わせ、ニタニタと笑いあった。
「私を、私をどうするおつもりです。」
二人の様子にただならぬ邪悪さを感じ取った女は不安に顔を青ざめさせながら叫んだ。
「お前は私の奴隷になるのだ。」
「何ですって。この私を・・・。」
「ふん。朝から晩までこってり可愛がってやるよ。私の責めはきついぞ。」
そこで王が口を挟んだ。
「ローヴェール、この間ゲスの人買いから買った女はどうなった。」
「死にもうした。」
平然とローヴェールはこたえた。
「女と一緒に商人から買った媚薬を飲ませたり塗り込んだりして一週間ほど楽しんでおりましたが、突如口から泡を吹いたと思ったら事切れておりましたわ。」
「カカカカカカ。」
またしても奇妙な声で王は笑った。
「この女はもう少し長くもたすが良いぞローヴェール。少々値が張った獲物だ。コスのために流した血を考えると、二ヵ月ほどは生かし楽しみが良いぞ。」
「・・・」
声もなく女は床に倒れこんだ。
その時だった。女の横にいた若い男がすばやく動き、衛兵を押しのけ玉座の王へ突進した。
とっさのことで王の周りの廷臣達も止めようがなかった。
「イリジオっ、死ねい。」
男は叫び、手に持った短剣をきらめかせ王の襟首をつかんだ。

しかしそこまでだった。
太っちょとは思えぬ軽い身のこなしで、いつのまにかローヴェールが駆け寄り、すばやい動きで剣を一閃させる。
ローヴェールの剣は男の頭頂部を切り取った。
血と脳漿を撒き散らせ男は王の上に倒れこんだ。
イリジオは無造作に男の死体を押しのけ、玉座のしたに蹴り落とした。
先ほど三人の捕虜を先導していた老人は、今や、王のとがめるような視線を受け、がたがた震えだした。
「トレロス。短剣を隠していたことに気づかなかったのか。」
「し、調べはいたしたはずですが・・・。」
「レリュアに無能の男は要らぬ。」
そして王は衛兵をあごでしゃくり命じた。
「こやつを連れて行け。正面の城門からくびり吊るすがよい。」
諦め、観念しきった表情の老人を二人の衛兵が引きずり出していく。
「とんだ茶番続きですな。」
剣にこびりついた血をべろりとなめながらローヴェール卿は言う。
ローヴェールの傍らにはコスの虜の最後の一人が事切れていた。
用心のためにいつのまにか殺したらしい。
一連の出来事で、さすがに大広間はしんと静まり返っていた。
いらだたしげに立ち上がってイリジオは叫んだ。
「ええい、辛気臭い。もっと飲め。叫べ。騒げ。これしきのことで何だお前たち。武名を十二国にとどろかせた“黒騎士隊”の名が泣くぞ。」
王の言葉に元気を取り戻した黒騎士達は一斉にどよめき叫んだ。
「おうおう、王よ。王こそ不死身のお方。」
「我らイラーの地獄の底まで王についていき申さん。」
人々は再び活気を取り戻し、笑い叫ぶ声や食器やグラスのたてる音がホールにこだまする。

宴も終わりに近づこうとしたときだった。
顔を緊張にひきつらせた若い伝令の騎士が広間の人々を押しのけ、玉座の前に額づいて言った。
「国境の宰相閣下の陣から内密の使者であります。」
「おお、老サイロフが何を言ってよこしたのか。」
騎士は一礼すると玉座の階段を駆け上がり、王に近づき何やら耳打ちした。
騎士の言葉に王はさっと顔色を改めた。
しばらく目を閉じ、腕を組んでじっと考え込む王の姿を、ローヴェールはじめ側近たちはじっとみつめていた。
突然、王は目をかっと見開き、剣を手に玉座から立ち上がって叫んだ。
「聞け、皆の者。宰相がよこした報せによると、ブルク神がサロゴンに現れたらしい。」
大広間の騎士達は会話や飲み食いを止め一斉に王に注目した。そして次の言葉を待った。
「なぜだかは知らぬが、かの国は＜十二神＞の恩寵を失った。この時を余は待っていたのだ。」
王はそこで言葉を切ると剣をきらりと抜き放ち、頭上にかかげ言い放った。
「天帝の寵を失ったサロゴンはもはや我々の切り取り次第ぞ。我がレリュアは今より、即刻サロゴンへ向け進軍いたす。」
二千人の騎士達の歓声と怒号が大広間をゆるがす中、イリジオ王は玉座を立ち、ゆっくりとした足取りで王宮の奥へと消えていった。
（サロゴンという国も欲しいが・・・）
険しい表情をつくりながらイリジオは心の中では甘美な期待に胸を躍らせていた。
（もうすぐ、あの女を手に入れられるのだ。姫を。サロゴンの見目麗しき姫君を。）
まだ見ぬサロゴンの美しい王女の白い裸身を思い浮かべながらイ

リジオ王は側近に尋ねた。
「コスの“忘却神”の徒の生き残りの女はまだいたか。」
「“忘却神”カレーグの神官の娘を一人捕らえてあります。」
「そいつで良い。余の寝室へ連れてまいれ。それからローヴェールを呼べ。女と一緒に来いと言え。」
命じながら、王はにたりと邪な笑いを浮かべた。
「コスの女二人をローヴェールとさいなみながら、サロゴン攻略の方法を考えるといたそう。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0937d/

五世界記　パイウォーター物語

2010年11月13日11時32分発行